

秋毛

宮本百合子

青空文庫

病^やみあがりの髪^{かみ}は妙にねばりが強くなつて、何^{なん}ぞと云つてはすぐこんぐらかる。

昨日、気分が悪くてとかさなかつたので今日は泣く様な思いをする。

櫛^{くし}の齒^はが引つかかる処を少し力^{ちから}を入れて引くとゾロゾロゾロと細い髪^{かみ}が抜けて来る。

三度目位までは櫛一杯に抜毛がついて来る。

袖屏風の陰で抜毛のついた櫛を握つてヨロヨロと立ちあがる抜^ぬけ上^{あが}つた「お岩」の凄い顔^{かほ}を思い出す。

只さえ秋毛は抜ける上^{うえ}に、夏中の病氣の名残と又今度の名残で倍も倍も抜けて仕舞う。

いくら、ぞんざいにあつかつて居るからつてやつぱり惜しい気がする。

惜しいと思う氣持が段々妙に淋しい心になつて来る。

細^{こま}かい「ふけ」が浮いた抜毛のかたまりが古新聞の上にくろがつて、時々吹く風に一二本の毛が上の方へ踊り上つたり靡いたりして居る様子はこの上なくわびしい。

此頃は只クルクルとまるめて真黒なピンでとめて居るばかりだ。

結つたつて仕様のない様な気がする。

若い年頃の人が髪^{かみ}をおろす時の氣持が思いやられる。

ピッタリと頭あたまの地じついた少ない髪を小さくまるめた青い顔の女が、体ばかり着ぶくれて黄色な日差しの中でマジマジと物を見つめて居る様子を考えると我ながらうんざりする。

毎朝の抜毛と、海と同じ様な碧色の黒みがかった様な色をした白眼の中にポツカリと瞳ひとみのただよって居る私の眼は、見るのが辛い様な気がする。

白眼が素直すなおな白い色をして居ない者は「□持」だと云うけれ共私もたしかにそうなのかもしれない。

時々、此の青っぽい白眼も奇麗に見える事があるけれ共、此頃の様なまとまらない様子をして居ると、眼ばかりが生きて居る様な——何だか先すぐ物にでも飛び掛りそうに見える。

弟が「どら猫」の眼の様だと笑った。

ほんとうに此頃は「どら猫」の生活をして居る。

眠りたいだけ眠り、気の向いた時食べ、そして何をするでもなくノソノソ家中歩き廻つて居る。

それでもまあ、少しばかり読んだり書いたりする位が人間らしい。

何か読むか書くかしなければ居られない私とその仕事を取りあげられて仕舞うと「どら猫」より馬鹿になって仕舞う。

ボンヤリと空をながめて居たり、うなだれて眼ばかり上眼を用つて物をねらう様な様子をしたりする。

変に陰気になつてろくに笑いもなくなる。

呑助が酒を取り上げられたのと同じになるのをつい此間から草花でまぎらす事を気がついた。

五六本ある西洋葵の世話だのコスモスとダーリアの花を数えたりして居る。

早^{はや}りつ気で思い立つと足元から火の燃えだした様にせかせか仕^しだす癖が有るので始めの一週間ばかりはもうすつかりそれに気を奪われて居た。

土の少なくなつたのに手を泥まびれにして畑の土を足したり枯葉をむしったりした。けれ共今はもうあき掛つて居る。

あんまり騒^{さわ}がなくなつた四五日前から前よりも一層ひどく髪が抜ける様になった。

女中に「抜毛を竹の根元に埋めると倍になって生えるそうだ」と母^{はは}が「裏の姫竹の根に埋めておやり」と命じた。

女中はハイハイとうけ合つて居たつけがそのまんま忘れて午後になつて見ると大根の切^{きれ}つ端^{はじ}やお茶がらと一緒に水口の「古馬^{ふるば}けつ」の中に入つて居る。

「オヤオヤヘエ」つて云いたい氣になつた。

別に腹^{はら}も立たない。

其のまんまに仕て置く。

こんな事をひどく氣にして居たら女中なんかと一緒に居られるもんじゃあない。

幾度も幾度も女中が變つて知つた事だけれ共、私が手紙を出しとくれと云つて先ぐ腰をあげる女は好い方である。

其の家の娘がたのんだ仕事の仕^し工^く合^{あい}で女中の氣持は大抵わかるものだと思う。

又こないだまで居た、話しにもならない様な女中の事を思い出す。

顔^{かほ}がかなりで生^{なま}半^{はん}分^{ぶん}物が分つて、悪い事に胆^{すわ}の座つた女ほど氣味の悪いものはない。

彼の女も一度だか私の髪を埋めた事が有つた事を思い出すとあんなものの手で埋められたのかと思うと髪^{かみ}の根元がムズムズする様だ。いやらしい。

一体秋になるといつもなら氣が落ついて一年中一番冷静な頭になれる時なんだけれ共今年^{とし}はそうなれない。

大変な損だ。

秋から冬の間に落ついて私の頭は其の他の時よりも余計に種々の事を収獲するんだけど共今年は少くとも冬になるまで別にこれぞと云う事もしないで居なければならぬ。

抜毛を見ながらも、変な青っぱい眼を見ながらも、徒に立って行く秋の貴さと健康の有難味を思う。

健康で居て暇無しに仕事をして行けるのが何より幸福だと、仕事をしたくて出来ない今つくづく思う。

わかりきった事の様だけれ共、ほんとうに心からつくづくと思うのは自分がそれをする事の出来ない様な境遇になつてからである。

「抜毛」のないものには、毛の抜けない気持よさが分らない——病気を生れて一度も仕た事のないものは達者で生きて居る有難が分らないものだ。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「宮本百合子全集 第二十九卷」新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋毛

宮本百合子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>